

新編
のたの書のまじり

特 116

284

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



116
284

習字研究会講師
齋藤春村先生書

新編のたのみの書まじり方

東京

春水社發行

はしがき

この本は、平假名を早くすらくと書きたいと望む人の爲めに編んだものである。假名に限つた譯ではないが、基礎となる處を十分に習へば、其の他の字は容易く書けるやうになるものである。初學のうちには、まだ十分に書けぬうちから、先へ先へと進むから、上手に書けずに終ることになるのである。そこで此の書の順序は、假名の基礎となる「獨草」といつて、一つ一つ離れた獨立體の假名の書き方に付て詳しく説いたのである。それゆゑ如何なる人でも此の説明の通りに練習したら、直に上手になれるといふわけである。この獨草の書方に熟練して、手本



を見ずに書けるやうになつたら、次の「變體假名」の書き方はさほど苦しまなくても、獨りてに上手に書けるに相違ない。此の方に熟したら、次には獨草がなや變體がなを取り交ぜた「連綿」の方に移るのである。

連綿の書き方は獨草と異つて、下の字につゞくために、又つゞくに都合のよいやうに書くべきものである。又下にある字は、上の字を承けて書くべきものである。それには二つの書き工合がある。其の一は、紙の上に書いた處を見てはつゞいては居なくとも、つゞくやうになつて居る。これを「氣脈」といつてある。其の二つは全く上の字と下の字とがつゞいてゐる。これは「血脈」と名づけてゐるものである。それゆゑ氣脈の方は一見して離れてゐるやうではあるが、精神はやはり

つゞいてゐるわけである。

連綿の仕方は二字より三字四字、多きは十字にも又それ以上にもなる。しかし二字若しくは三字四字位までつゞけた方が書きよくもあるし、又見よいものである。餘りに多くつゞけては、上手になれば格別、さもなければ餘り多くつゞけぬ方が、見ても讀んでもうるはしいものである。なほ練習について用具のことを少しく附記しておく。

筆 筆は水筆がよい。そして新しいのがよい。古いのは鋒先がないから思ふやうな字は書けぬものである。筆の持ち方は姿勢と共に大切なことであるし、又出來榮に大に深い關係のあるものであるから、一寸説明を加へておくことにす

る。筆の持ち方の最も善いのは「双釣」である。即ち人指指と中指とを掛けて持つのである。持つたときは、實指虚掌といつて、指に力を入れて確かりと持ち掌は手巾を握つたほどにする。そして筆は眞直にして書くのである。筆を持つことは其の時限りのものではなく、一生涯の事業なのであるから、始によい習慣をわが身に附けることは

※ 肝要なことである。ここにその圖を示すことにす



(4)

墨は古梅園製の紅花墨がよい。墨汁でも墨素でも悪くはない。時間の經濟からは却つて此方がよい。たゞ餘りに下等の品は凡ての點に於て不經濟である。磨り方は軟かに磨るほどよい。急いで力強くする事は禁物としてある。

硯は赤間か雨畑あたりでよい。常に洗つて奇麗にして置かなくてはならぬ。

紙は日本紙で、にぢまない白紙を用ゐるがよい。

大正十年三月二十八日淡雪を眺めつゝ

齋藤春村識

(5)



- (い) — (い)は線にて示せる如く、左上から右下に斜に書いて圓味をもたせ、(ろ)は(い)の筆をうけて打つ。
 (イ)の處、廣く、又(ろ)の位置を知るべきである。
- (ろ) — 線で示したやうに、中心の線より右へも左へも同じく、三角形になるやうに書くのである。
- (は) — (い)は傍に示した圓のやうに、圓味がある。右の方は、横線で示したやうに(ろ)と(は)とは(い)の如く、括弧を反對においたやうに書く。
- (に) — (い)は前にある「は」の字の書き方の(い)に同じ。(ろ)と(は)は(い)括弧のやうに書き、(イ)の處はひろく書くのである。

ほ

へ

と

ち

(ほ)——(い)は前の「に」の字の(い)と同じ。(イ)と(ロ)は、(一)括弧のやうに、(ロ)と(ニ)とは(一)括弧を反對にしたやうに書く。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は、分間を示したものである。

(へ)——横線で示したやうに、(イ)の方が高く(ロ)の方が低い。(イ)ロの處は圓く書くのである。

(と)——(い)は立てる、斜に曲げてはならない。(ろ)の處曲げて終りの所少し上げ氣味に書くのである。

(ち)——(い)太く右上りに書き、(ろ)は眞直ぐに引き……の處力をぬき、次の……の所力を加へて早く筆を拂ふ。

り

ぬ

る

ち

(り)——(イ)と(ロ)は傍の圖のやうに、(一)括弧を書くつもりで書き、(ロ)の方は上にも下にも長く、そして終りは勢よく拂ふ。

(ぬ)——(イ)は長く書く。……の處はむつかしければ、手本によつてよく習つてみるがよい。(ロ)はこの字の工合を考へて打つべきで、大切の一點である。

(る)——(イ)(ロ)(ハ)の線は、この字を細長く書くべきことを示したものである。下の方を廣くすると、見にくい字になる。

(ち)——(い)は力強く(ろ)は(一)に遠く(ほ)は前にある」との字の(ろ)のやうに書く。(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は分間を示したものである。

あ か よ た

(わ) — (い)は傍の圖のやうに書くので、眞直ではない。(ろ)は線で示したやうに、少し右 upper になつただけである。……の處むつかしい筆故十分習ひ試みるがよい。

(か) — (い)は楕圓をかく心持である。(ろ)は短かく(は)は線のあるやうに高くはなして書く。

(よ) — (い)は太く右 upper に打つ。(い)は眞直ではないやうにかく。(い)と(ろ)は(ハ)括弧を反對にしたやうに書くのである。

(た) — (い)と(ろ)は()括弧のやうに書くのである。線は中心を示したものである。

れ そ つ ね

(れ) — (い)は「わ」の字の(い)に同じ。(い)の間廣く、……の處角立たぬやうにかく。○の處上る。線は傍の長さと位置とを示したのである。

(そ) — (い)(ロ)(ハ)は分間を示したものである。……の處は注意して習はぬと巧く出来ない。

(つ) — 線で示したやうに、少し右 upper にかく。……の處始め力をぬき、終り力を加へ、強く拂ふのである。

(ね) — (い)は「れ」の字の(い)の書き方に同じい。……の處注意して習はなくてはならぬ。線は長さと位置とを示したものである。

な ら む じ ゅ

(な) — (イ)短く、(ロ)長く、(ハ)離して高く。……の處十分注意。線は分厚を示したものである。

(も) — (イ)(ロ)(ハ)は中心と廣さの工合を示したものである。……の處細かく注意して習はなくてはならぬ。

(む) — (イ)力を入れて右上りに。(ハ)の結ぶ處大きく、結び終つたらすぐ(ロ)に向つて曲げる。(ロ)少し上る。(ハ)高く書くべし。……の處注意。

(じ) — 中心の線によつて、(イ)と(ロ)の位置を考へなくてはならぬ。……の處圓く、(ハ)の處眞直にして強く筆を拂ふ。

あ の お く

(あ) — (イ)強く點を打ち、(ロ)左下斜に引く。それより筆を反して(ハ)右上りに(ニ)大切の筆である。……の處何れも六かしいから注意しなくてはならぬ。全體が三角形になる。

(の) — (イ)は圓の心持ち(ロ)に力を加へて力を抜き、又力を加へて拂ふ。全體は圓形である。

(お) — (イ)(ロ)(ハ)何れも圓のやうに書く。線は中心を示したものである。

(く) — (イ)強く(ロ)眞直(ハ)右上り(ニ)高く(ハ)中心(ロ)(ハ)は(ハ)に向つて同じ廣さである。横線は(ニ)の位置を示したものである。



(や) 横線は(い)が右よりなることを示し、(イ)(ロ)は第一筆と(ろ)の交はる處と(ロ)の曲る處が平らであることを示し、縦の線は分間を示したものである。

(ま) (イ)(ロ)(ハ)の線は分間の工合を示したものである。……の處注意しなければならぬ。

(け) (イ)の處巾廣く、横線にて見るやうに、(ろ)の第一筆は上にも下にも長いのである。……の處注意。

(ふ) (イ)の第一筆はSの字の形に書いて、中心を失つてはならぬ。(ロ)と(ハ)は中心より同じ距離の處にうつ。(ハ)は少し上がる。

(こ) (イ)と(ロ)は圓のごとく(ハ)括弧のやうに書いて而も中心を失はぬやうに書くのである。……の處注意。

(え) (イ)の線は高く、ロは長くても分間が正しい。(い)と(ろ)とは平らに。……の處注意。(ろ)の處少し上げる。

(て) (イ)の處をもどして圓を書くつもりで(ロ)に行つて筆を止める。

(あ) (イ)太く長く、(ロ)立てる。(ハ)左下に長く。……の處注意しなくてはまともな字になる。





(さ) — (イ) 太くすく、(ロ) 右下に少しく斜にして筆をかへし、(ハ) 圓く短かくする。
 (き) — (イ) と (ロ) とは () をかくやうにして太く短かく巾廣く、(ハ) 左下に向ひ、(ニ) 圓く書く。横の線は
 分間を示したものである。
 (ゆ) — (イ) (ロ) () 括弧をかくやうに (ハ) の一筆が中心となるやうにかく。
 (め) — (イ) 長く、短い線は分間の工合を示したものである。……の處むかしい筆使ゆえ、注意しなくてはな
 らぬ。



(み) — (イ) 左下に斜に (ロ) 圓平に (ハ) は (イ) と平行するやうに書く。全形が三角である。
 (し) — 線で示したやうに眞直になるのである。之の字から出たもの故、變體の之の字でもわかるやうに五曲り
 になるわけである。
 (系) — 全體が三角形である。上の「る」はつめて小さくし、下の三點を廣くする。(ロ) は下り (イ) は少し上り
 (ハ) は最も高く打つのであるが、拂ふ處で (イ) と同じ位置になるのである。
 (ひ) — (イ) (ロ) の線で示すやうに右上から 左下斜になる字である。……の處 (ハ) の打ち工合など注意すべ
 き處である。



(も)——(イ)(ロ)(ハ)は分間を示したものである。
 (せ)——(イ)は線にて示したやうに少し右 upper になる。(ハ)(ロ)のある處は(イ)を三分した處に書く。(ニ)は平らになるやうに書く。
 (ず)——(イ)は(イ)の線で示したやうに少し右 upper に書くのである。そして長いのがよい。(ロ)はろの中心より少し右から書く。圓を結ぶ處より下……の處短かく書く。
 (ん)——(ニ)(ホ)の線で示したやうに斜に書く。(ロ)(ハ)は巾を示したものである。(イ)の線は下の方の工合を示すために線をおいたものである。



地	度	遍
<small>地</small>	<small>度</small>	<small>遍</small>
達	登	弊
<small>達</small>	<small>登</small>	<small>弊</small>
致	土	止
<small>致</small>	<small>土</small>	<small>止</small>
利	知	東
<small>利</small>	<small>知</small>	<small>東</small>
里	干	斗
<small>里</small>	<small>干</small>	<small>斗</small>

報	耳	葉
<small>報</small>	<small>耳</small>	<small>葉</small>
疾	兒	仁
<small>疾</small>	<small>兒</small>	<small>仁</small>
暮	二	丹
<small>暮</small>	<small>二</small>	<small>丹</small>
邊	保	丹
<small>邊</small>	<small>保</small>	<small>丹</small>
通	本	丹
<small>通</small>	<small>本</small>	<small>丹</small>

世	哥	倭
代	香	加
多	與	可
堂	余	閑
當	餘	架

遠	努	李
乎	留	理
越	流	梨
和	累	離
王	類	怒

羅	那	禰
武	那	年
無	難	奈
年	良	奈
舞	樂	奈

處	曾	堂
川	曾	禮
徒	所	連
都	所	麗
津	楚	麗

万	求	於
萬	空	於
未	屋	久
滿	夜	九
真	耶	具

能	羽	舞
農	居	夢
濃	井	宇
延	遺	有
於	乃	雲

阿	天	盈
阿	天	盈
古	轉	延
左	轉	延
休	傳	要
佐	傳	要
斜	亭	愛
斜	亭	愛
友	安	天
散	安	天

故	布	希
故	布	希
胡	夫	氣
胡	夫	氣
衣	婦	介
衣	婦	介
江	許	遣
江	許	遣
得	古	不
得	古	不

之	善	免
志	見	西
四	三	米
新	方	馬
此	微	迷

由	起	沙
遊	喜	狹
游	貴	幾
愈	木	幾
女	寄	支

彼	比	始
<small>彼</small>	<small>比</small>	<small>始</small>
毛	飛	師
<small>毛</small>	<small>飛</small>	<small>師</small>
母	非	惠
<small>母</small>	<small>非</small>	<small>惠</small>
裳	悲	衛
<small>裳</small>	<small>悲</small>	<small>衛</small>
聞	日	會
<small>聞</small>	<small>日</small>	<small>會</small>

寸	望
<small>寸</small>	<small>望</small>
春	茂
<small>春</small>	<small>茂</small>
數	世
<small>數</small>	<small>世</small>
須	勢
<small>須</small>	<small>勢</small>
壽	聲
<small>壽</small>	<small>聲</small>

夜 月
 うよのほよ
 雨 過
 あまのきき
 葉 露
 はのつゆのうた
 上 庭
 にま
 草

味 句
 味にわふ 春 山
 櫻 花
 味にまのうた
 霞 出
 りすまを
 春

夜 月 嶺 澄 秋 任 置 高
 よのつき ね 月 嶺 澄 秋 任 置 高
 のつき ね 月 嶺 澄 秋 任 置 高

屢 宿 夏 夜 見 人 心 心
 屢 宿 夏 夜 見 人 心 心
 屢 宿 夏 夜 見 人 心 心

冬 夜 月
 冬 夜 月
 松 松
 懐

水 鳥 聲
 身 池
 宛 凍
 面

雪 草 庵 朝
 寸 兼 揭 朝
 何 草 庵 朝

色 深 高
 譽 今 世
 語 傳 馨

夜

雨

高

よりのあはれをさす

譽

いま

世

語

後まよひらふに

つた

悉

あはれをさす

菅原朝臣

あはれをさす

あはれをさす

あはれを

あはれを

あはれを

あはれを

素
あつ日
あつ日

蓮の
あつ日

空
蟬

あつ日
あつ日
あつ日

あつ日
あつ日
あつ日

あつ日
あつ日
あつ日

あつ日
あつ日
あつ日

あつ日
あつ日
あつ日

あつ日

あつ日

清書修正券

(限回一人)

線……取……切……

清書修正券

(限回一人)

線……取……切……

清書修正券

(限回一人)

清書修正券

清書修正券

清書修正券

清書修正券

清書修正券

清書修正券

清書修正券

清書修正券

清書修正券

この本で十分お習ひになり
ましたら、自筆の清書を書
き、この「修正券」と、三
錢切手二枚を同封して、本
書の筆者齋藤先生の所へお
送りなさい。親切に修正し
て返してあげます。宛所は
東京市小石川區關口
水道町五十九番地
齋藤春村先生

.....線.....取.....切.....

この本で十分お習ひになり
ましたら、自筆の清書を書
き、この「修正券」と、三
錢切手二枚を同封して、本
書の筆者齋藤先生の所へお
送りなさい。親切に修正し
て返してあげます。宛所は
東京市小石川區關口
水道町五十九番地
齋藤春村先生

.....線.....取.....切.....

この本で十分お習ひになり
ましたら、自筆の清書を書
き、この「修正券」と、三
錢切手二錢を同封して、本
書の筆者齋藤先生の所へお
送りなさい。親切に修正し
て返してあげます。宛所は
東京市小石川區關口
水道町五十九番地
齋藤春村先生

□ 有 所 權 版 □

大正十年八月廿五日印刷	著 者	齋藤春村	東京市小石川區關口水道町五九
大正十年九月十五日發行	發行者	宇野共次	東京府豊多摩郡戸塚町下戸塚三
	印刷者	白井赫太郎	東京市神田區美土代町一ノ二一

新編かなの書き方
【定價四拾錢】

發行所

東京市牛込區
早稲田中學隣

春 水 社

振替口座東京
三九六三四番

大町桂月氏序
山内秋生氏著

読んで
すぐ役に
立つ

手紙の書き方

手紙ぐらゐ何で
もないと高をく
くる人に限つて
手紙上手のため
しがない！書き

四六版金文字
上製箱入美本
定價金 一圓
送料金 八錢

先づ手紙の書き方を筋道を立てて説明し手紙に必要なあらゆる文語用語を悉く掲げそして口で話すまま手紙にする法、候文を自由自在に書く法、手紙を上手に書く最も良き方法を親切に説き祝賀、見舞、依頼など百般の用件をはじめ嬉しい手紙、悲しい手紙、美しい手紙等悉くその作法を説いた上數百の文例を掲げ殊に新式活用法により一通の手数が幾通にも應用自在であるドンな初學者でも一度本書を読めばスラ／＼と上手に書ける事請合である。

方を一通り心得
てうまくなりた
いと思ふ人は此
本によるが最も
よい萬人必讀！

阪水野兩氏書
中村珍郎氏著

作り方
と習字

女子新手紙文

四六版紫表版
和装箱入美本
定價金 一圓三十錢
送料金 八錢

女子の手紙は男子とは多少異なる點もあれば専門に習得する必要がある。本書には第一に手紙は如何なる心持によつて書くべきかを詳説し特殊の文語用語を掲げ祝ひ、喜び、見舞、報知等日用百般の手紙作法及び文例數百を掲げた外書式及び郵便差出し方の注意まで懇切に説いてある。殊に書道の大家阪正臣先生の毛筆手本と文壇の大家水野葉舟先生のペン字手本とあり、之によつて字を習ひ手紙を書けば眞に完全無缺と云ふべく天下女子手紙本中無二の良書である。

手紙の事なら何でも分る新案辭典



模範的大著述 二萬人机上の必備品

●手紙研究會 會監 大町桂月先生 監修

●山内秋生先生編著

●三六版クローズ表紙最新形

●箱入美本 ●紙數約八百頁

(定價金貳圓の處特價割引)

特價 金壹圓七拾錢
送料 金拾貳錢

ハガキで御注文あれば後金
着本拂にて急送す(但し後
金は送料貳拾錢増の事)

此書一册あれば

社交にも實務にもドンナむづスグ書ける

手紙の本は数多いが或一方のみ
で凡ての事を一冊に集めた本が
ないのを不満とし三年間を費
やして苦心完成せし現代の先づ
手紙の歴史、法則、自由、現法、口
語體及文書を自由に書く説法、日
の儘を文に書く秘訣を詳説し、儀
用、一般の文、紙、公用、商、儀
男、女、美、文、等、悉く作法、例、式、
げ、上、手、紙、葉、書、封、筒、の、書、式、
ド、マ、字、英、文、の、認、め、方、名、刺、カ、
保、存、法、電、報、文、手、紙、の、複、寫、及、整、理、
包、贈、物、の、差、出、方、等、ま、で、總、目、録、數、
千、項、に、及、ぶ、外、▲年、賀、▲祝、賀、▲通、知

披露招待案内見舞慰問
弔問贈答謝禮誘引依頼
註文問合借用請求催販
紹介推薦勸誘取消販賣
信用忠告辯解趣味相談
其他喜怒哀樂の心を現はす手紙
まで數千篇の文範は必要の度に附
録として應用自在である殊に附
録として應用自在である殊に附
文語三萬語字引
書證 届書類書式一覽
を附す、一冊を机上に備へて毎
日の便利に供せられよ。

發行所

東京市牛込區早稲田中 春水社
東京市牛込區早稲田中 春水社
東京市牛込區早稲田中 春水社

習字研究會講師
齋藤春村先生書

新編 **かなの書き方**

全部寫眞銅版光澤紙印刷
三六版新式綴空前の美本
定價 四 十 錢 送料 二 錢

習字者の
寶典

かな書きは習字の土壌であります。かながまづなくてはともうまい字は書けません。本書は先づいろはの各々字を一一圖解によつて書き方を説明し、云ふ所の「獨草かな」を覚えさせた上あらゆる種類の「變體かな」のお手本を掲げ、次に「連綿體」と云ふかなをつづけて書いたおし本から、色紙や短冊の書き方まで示してある習字界唯一の良書であります。(清書無料修正券添附)

女子の
必携書

四季をりをりの女子の手紙を、美しい文字で書いたお手本で、字を習ひながら文も覚えられます。體裁は「かなの書き方」と同じで、全部寫眞版で文字をあらはし、上等の光澤紙に印刷した空前の美本で、形は三六版小形で机上に開くに便別な上、新式のとび方で表紙や文の美しさは、上品な机上の裝飾にもなりません。之までに類の無いよい本です。(清書無料修正券添附)

巖谷小波先生序
齋藤春村先生書

習字兼用 **女子の手紙**

全部寫眞銅版光澤紙印刷
三六版新式綴空前の美本
定價 四 十 錢 送料 二 錢

終

